

ヘブル人への手紙5章「大祭司イエス」

1A 人となられた方 1-10

1B 弱さへの同情 1-6

1C アロンの祭司職 1-4

2C キリストの祭司職 5-6

2B 苦しみよる従順 7-10

2A 霊的成熟 11-14

本文

ヘブル書 5 章に入ります。5 章から、ヘブル書の醍醐味とも言える、「大祭司なるイエス」の中身に入ります。不信者のユダヤ人から激しい迫害を受けていたユダヤ人信者たちに対して、あらゆる苦しみを通られ、ついにご自身が罪のいけにえとなられた、祭司の務めを全うされたイエス様の姿を、著者はぜひ見せたいと思いました。

著者は、2 章からこのことを小出しにしています。「ただ、御使いよりも、しばらくの間、低くされた方であるイエスのことは見えています。イエスは、死の苦しみのゆえに、栄光と誉れの冠をお受けになりました。その死は、神の恵みによって、すべての人のために味わわれたものです。神が多くの子たちを栄光に導くのに、彼らの救いの創始者を、多くの苦しみを通して全うされたということは、万物の存在の目的であり、また原因でもある方として、ふさわしいことであったのです。(9-10 節)」そして 17-18 節です。「そういうわけで、神のことについて、あわれみ深い、忠実な大祭司となるため、主はすべての点で兄弟たちと同じようにならなければなりません。それは民の罪のために、なだめがなされるためなのです。主は、ご自身が試みを受けて苦しまれたので、試みられている者たちを助けることができになるのです。」御子であられるイエスが人となられて、人の弱さを身にまとい、人の受ける試みをすべて受けるようにされました。そして 3 章 1 節に、この大祭司なるイエスのことを考えなさい、と命じています。

彼らが苦しむ時、試みられる時に、そばにおられるイエスがおられること、それによって助けを得ることができることを、4 章の最後で話しました。「さて、私たちのためには、もろもろの天を通られた偉大な大祭司である神の子イエスがおられるのですから、私たちの信仰の告白を堅く保とうではありませんか。私たちの大祭司は、私たちの弱さに同情できない方ではありません。罪は犯されませんでした。すべての点で、私たちと同じように、試みに会われたのです。ですから、私たちは、あわれみを受け、また恵みをいただいて、おりにかなった助けを受けるために、大胆に恵みの御座に近づこうではありませんか。(14-16 節)」このように、おりにかなった助けを受けることができるのだ、ということを強調した後で、いよいよ、大祭司なるイエス様をじっくりと見ていきましょう、ということになります。

1A 人となられた方 1-10

1B 弱さへの同情 1-6

1C アロンの祭司職 1-4

1 大祭司はみな、人々の中から選ばれ、神に仕える事がらについて人々に代わる者として、任命を受けたのです。それは、罪のために、ささげ物といけにえとをささげるためです。

初めに、大祭司とは何かをじっくり説明します。旧約聖書を信じているユダヤ人たちにとって、大祭司はもっとも大きな務めの一つでした。祭司は、主が住まわれるところの幕屋で奉仕をする人たちです。イスラエル人たちが持ってくるいけにえを、祭壇の上で焼きます。洗盤で手足を洗って、聖所の中に入ります。そこには、燭台がありますが、日々、その灯を絶やすことのないようにします。パンを供える台がありますが、そのパンを週ごとに取り換えて整えます。また香壇があり、そこで香を炊いて、主の前への香りとしします。このような祭司の務めは、彼らがイスラエルの民に代わって、神の前に出て行って、神に礼拝をささげる人たちだからです。

そして、モーセの弟アロンが、神から任命されて大祭司となり、その子孫が代々大祭司となっています。大祭司は、聖所の中にある至聖所の中に年に一度入ります。至聖所には、契約の箱と贖いの蓋があり、贖いの蓋には御使いケルビムがいます。そのケルビムの間に、主がおられて、主の栄光によって、輝いています。大祭司は年に一度、贖罪日のときに至聖所に入って、動物のいけにえの血をたずさえて、イスラエルの罪の贖いをします。こうしてイスラエルの罪がきよめられ、赦されて、神に受け入れられた者となります。このように、大祭司は、神と人との間に仲介役の務めを行なっています。

そしてこの大祭司は、「人々の中から選ばれ」なければならないと書いてあります。当たり前のように聞こえますが、これが大事な条件なのです。というのは、大祭司は人の弱さや罪を担いながら、神の前に出る存在であり、もし弱さを持っていなかったら、人の代表となることはできないからです。

これは当然、神に対して祭司となっている私たちクリスチャンにも当てはまります。私たちはとかく、自分たちがクリスチャンらしくならなければいけないと思って、いろいろな取り繕いをしてしまいます。が、そのために人間味がなくなってしまう。教会の中にクリスチャンとはこうあるべきだという、目に見えない枠組みを作り、一種特殊な雰囲気教会の中にかもし出してしまうことがあります。しかし、私たちは人間なのです。

そして、「人々に代わる者」とあります。大祭司が、神の前に出ていくときに人々のために出ていきます。人の代表として神の前に出ます。執り成しの祈りというのは、まさに祭司的な働きです。他の人々に代わって、自分が神の前に出ていきます。

そして、「罪のために、ささげ物といけにえとをささげる」とあります。捧げ物は、穀物の捧げ物などです。そして「いけにえ」は、火による捧げ物で、全焼のいけにえ、罪のためのいけにえ、和解の

いけにえなどです。

2 彼は、自分自身も弱さを身にまとっているので、無知な迷っている人々を思いやることができるのです。

大祭司は人ですから、もちろん人としての弱さを持っています。弱さを持っているので、無知な人や迷っている人を思いやることができます。「無知」というのは、罪について知らないということです。知らずに犯した罪、と旧約聖書にあります。それに該当します。そして、「迷っている」とは、罪を犯してしまった状態です。この人を、「思いやることができる」とあります。元々は、極端な感情の間のバランスを取る、という意味合いがあります。つまり、罪を犯している者に対して、「別に構わないでしょう。」と無関心になってはいけません。罪は罪で深刻に捉えないといけない。それと同時に、その罪に対して極端に反応して、過度に断罪しないということです。

この思いやりは、私たちクリスチャンも持ち合わせなければいけないものです。ガラテヤ書6章1節にはこう書いてあります。「兄弟たちよ。もしだれかがあやまちに陥ったなら、御霊の人であるあなたがたは、柔和な心でその人を正してあげなさい。(ガラテヤ 6:1)」誰かが罪を犯したときは、私たちはすぐに人を裁きやすいものです。そして、なぜあんなことを彼はするのかと、上から下へ見下ろすような態度を取りがちです。しかし、それは、自分自身が弱い存在であることを忘れていたためです。自分も、似たような状況の中に置かれれば、同じように罪を犯すことを知っているならば、さばくことはできません。だれかがあやまちに陥ったなら、柔和な心でその人を正します。

3 そしてまた、その弱さのゆえに、民のためだけでなく、自分のためにも、罪のためのささげ物をしなければなりません。

大祭司は、贖罪日のときに、イスラエルの罪のために至聖所に入りますが、その前に、自分の罪のためのいけにえもささげます。レビ記16章6節には、「アロンは自分のための罪のためのいけにえの雄牛をささげ、自分と自分の家族のために贖いをする。」とあります。自分の罪の贖いをしてからではないと、至聖所に入ったときに彼はすぐに神に打たれて死んでしまいます。この部分は、イエス様とアロンと異なる部分です。イエス様は人となられましたが、罪は犯されませんでした。罪はないのですから、ご自分のためのいけにえは必要となさませんでした。

ここで多くの人が、誘惑を受けた時にそれが罪を犯したことだと間違っています。悪い思いを持ったならそれが罪であると思っています。いいえ、イエス様ご自身も、そのような悪い思いが悪魔によって入ってきました。荒野で誘惑を受けられた時のことを思い出してください。けれども、その誘惑に屈しなかったのです。ですから、試みを受けられたけれども罪は犯されなかった、ということです。したがって、私たちにも誘惑を受けてもそれに屈しない力が、その弱さを知っておられるイエス様によって与えられるのです。

4 まただれでも、この名誉は自分で得るのではなく、アロンのように神に召されて受けるのです。

アロンは自己推薦をして、大祭司となったのではありません。神がアロンを召し出して、彼を大祭司に任命されました。民数記において、アロンの祭司職をねたんで、モーセとアロンに挑みかかった者がいました。レビ人のコラです。彼は人々から人気がある、有能な奉仕者であったようです。そこで、アロンのことを、「彼はイスラエルの民の上に立って、やりたい放題をしている。我々を約束の地に導き入れることもできなかったのに、何が祭司であろうか。みな聖なる民は平等なのだから、あなたはその地位から降りるべきだ。」というようなことを言いました。すると、彼とまた共謀者は生きてまま地の中に落ちてしまい、神に裁かれました。そこで神は、イスラエル12部族の指導者をそれぞれ呼び出され、レビ族からはアロンを呼び出されました。それぞれの杖を契約の箱の前に置かせました。そして翌日、アロンの杖からアーモンドの芽が出て、花がさき、実が結ばれました。神はアロンを、大祭司の務めとして任じておられたのです。

新約聖書には、私たちは、賜物を用いて、恵みの管理者として、互いに仕えていきなさいと勧められています(1ペテロ 4:10)。そして、自分に与えられた恵みにしたがって、思うべき限度を超えて思い上がることなく、慎み深い考え方をしなさいとも勧められています(ローマ 12:3)。私たちはアロンと同じように、神によって何かに任じられており、その分をわきまえて、賜物を用いて、恵みを分かち合っていかなければいけません。自分が行っていること、語っていることが、果たして神によって任じられたことであるのかどうか、吟味してみてください。なぜなら、神が自分に与えてくださった召しを知らないと、その人はでしゃばったことをしたり、また臆病になってしまったりします。教える者ではないのに人を教えようとしていたり、指導者ではないのに人の上に立とうとしていたり、思い上がることもあります。私たちが神の恵みのうちに留まれば、自分の分を知ることができ、そこから度を超えて思い上がることはなくなるのです。むしろ、人々に恵みを分かち合うことができます。ですからアロンのように、神から何に任じられているかを知るの大切です。

2C キリストの祭司職 5-6

ここまでが、アロンの祭司職の説明でした。次に、キリストも大祭司として任じられていることが説明されています。

5 同様に、キリストも大祭司となる栄誉を自分で得られたのではなく、彼に、「あなたは、わたしの子。きょう、わたしがあなたを生んだ。」と言われた方が、それをお与えになったのです。

ヘブル人への手紙の中で、この詩篇第二篇の聖句が何回も引用されています。イエス様が、父なる神から、「あなたは、わたしの子」と呼ばれている栄誉です。アロン系の大祭司は、このような栄誉は受け取っていませんでした。イエスのみが、「わたしがあなたを生んだ」と宣言されました。具体的には、イエスが復活された時に神の御子として公に現れました。

イエス様はご自分で働きを進められたのではなく、父なる神から任じられて宣教の働きをされま

した。イエスさまがバプテスマをお受けになられたとき、「あなたは、わたしの愛する子、わたしはあなたを喜ぶ。(ルカ 3:22)」と上から声をかけられました。また、高い山でイエスさまの御姿が変わったときは、「これは、わたしの愛する子、わたしはこれを喜ぶ。彼の言うことを聞きなさい。(マタイ17:5)」と弟子たちに語られました。

6 別の個所で、こうも言われます。「あなたは、とこしえに、メルキゼデクの位に等しい祭司である。」

イエスさまは、十字架につけられ、よみがえられ、天に昇られてから、神の右の座に着かれました。いわば王子として座っておられます。けれども、メシヤは王としてだけではなく、大祭司とられた、というのがヘブル書の著者の主張です。詩篇 110 篇を開いてみましょう。

110 ダビデの賛歌 1 主は、私の主に仰せられる。「わたしがあなたの敵をあなたの足台とするまでは、わたしの右の座に着いていよ。」2 主は、あなたの力強い杖をシオンから伸ばされる。「あなたの敵の真中で治めよ。」3 あなたの民は、あなたの戦いの日に、聖なる飾り物を着けて、夜明け前から喜んで仕える。あなたの若者は、あなたにとっては、朝露のようだ。4 主は誓い、そしてみこころを変えない。「あなたは、メルキゼデクの例にならい、とこしえに祭司である。」5 あなたの右にいます主は御怒りの日に、王たちを打ち碎かれる。6 主は国々の間をさばき、それらをしかばねで満たし、広い国を治めるかしらを打ち碎かれる。7 主は道のほとりの流れから水を飲まれよう。それゆえ、その頭を高く上げられる。

イエス様が十字架につけられる前に、ユダヤ人指導者に対して一節を引用されましたね。主が、ダビデの主に仰せられる、と言っているが、キリストがダビデの主であれば、どうしてダビデの子であるのか？という問いかけです。主なる神がキリストをご自分の足台とする、つまり踏みにじるまでは右の座に着いていなさい、と命じておられます。これは、立ち上がられる時は、王としてこの地を君臨する時です。その時には力強い杖をもって敵を打ち碎き、この地上に神の国を打ち立てられます。3 節の「あなたの民」とは、教会のことです。19 章の前半で、小羊の婚宴があり、その時に教会は白い亜麻布の衣を着せられています。そして 5-7 節はイエス様が戻ってこられて、敵を滅ぼされる姿が書かれています。

4 節に、王なる神の御子であられる方が、同時にとこしえの祭司となると宣言されています。祭司はみな、アロンの直系の者でなければいけません。けれども、王たちはユダから出てきます。メシヤが王であり、かつ祭司であるというのは、矛盾するわけです。ところが主は、神の御子はアロンの位ではなく、メルキゼデクの位であると言うのです。このことについての説明を、著者は 7 章で詳しく行います。ここで大事な点は、イエス様は大祭司とられたということです。

2B 苦しみよる従順 7-10

7 キリストは、人としてこの世におられたとき、自分を死から救うことのできる方に向かって、大きな

叫び声と涙とをもって祈りと願いをささげ、そしてその敬虔のゆえに聞き入れられました。

大祭司となられるキリストは、先に書かれていたように人の弱さを身にまもっていました。ここに描かれているのは、ヘブル書 2 章にもあった、苦しみを通られたという点です。「自分を死から救う」「大きな叫び声と涙」、そして「祈りと願い」、これらがみな、私たちが人間であるならみな知っていることです。誰でも死から救われたい、誰でも大きな叫び声と涙を持っています。祈りと願いも持っています。イエス様は人となられたゆえに、これらのことを経験されたのです。

これは、イエス様がゲッセマネの園において、もだえ苦しみながら祈られたときのことです。「自分を死から救うことのできる方に向かって」とあり、祈りが聞き入れられた、とありますが、これは死を免れる祈りではありません。イエス様は十字架につけられることは知っていました。十字架を避けるのではなく、十字架上で死んだ後に、墓からよみがえることを願われたのです。

そして、「大きな叫び声と涙」というのは、イエス様が祈られた時にそうなっていました。私たちはとかく、イエス様は静かな方のように思い描いてしまいがちですが(映画の影響もあって)、はたから見たら取り乱すような祈りをされていたに違いありません。さらに、「祈りと願い」ですが、祈りは一般的な願いであり、願いというのは個別の願いのことです。そして、「敬虔」とありますが、これは「神を恐れる」ことです。神を敬うがゆえに、この悶え苦しみを通られました。

私たちはいかがでしょうか、大きな叫び声と涙で祈りと願いをささげたことがありますか？いつも平然とした祈りしかしていないのであれば、それが真実な祈りになっていない可能性があります。神殿の中で、「私はこれこれのことができています。」という自信過剰の祈りをささげたパリサイ人に対して、神殿の外で胸をたたき、天を見上げず、「私は罪人です。憐れんでください。」と祈った取税人との二つで、どちらの祈りを捧げているのでしょうか？

8 キリストは御子であられるのに、お受けになった多くの苦しみによって従順を学び、

御子というのは神の立場です。天地万物の創造主の御子、すなわちご自身も創造主です。この神が人となられて、人であるがゆえに受ける苦しみがありました。その苦しみの中でさえ神の御心を行うという従順を学ばれました。

以前、英国のウィリアム王子がホームレスとしてロンドンの路上で一夜を過ごした、というニュースをみて驚きました。ホームレス支援団体を通して、気温が氷点下4度まで下がる中で、段ボールの上に寝そべり、眠れぬ夜を過ごしたということです。麻薬密売人に声をかけられたり、誰かにけられたりする恐怖も味わうこともあるそうで、実際に、気づかずに道路清掃車にひかれそうになった、とのこと。「この体験のあと、王子は「一夜体験した後でも、毎晩ロンドンの路上で寝ることが本当はどういうことなのか、私には想像もできない」と語り、路上生活者が直面しているあらゆる問題について深く理解しようと決心した(afpbb.com/article/life-culture/life/2677700/5078588)」

とのことですが、8 節で語られているのは、このようなことです。神の御子が人となられて、人の苦しみと虐げを受けられたことによって、従順を学ばれました。

9 完全な者とされ、彼に従うすべての人々に対して、とこしえの救いを与える者となり、

「完全な者とされ」というのは、父なる神に十字架の死、その最後まで従われて、その働きを全うされたということです。死なれる直前に、「完了した」と言われました。

そして「彼に従うすべての人々に対して、とこしえの救いを与える者となり」とあります。同じ内容を、著者はすでに 2 章 10 節で話しました、「神が多くの子たちを栄光に導くのに、彼らの救いの創始者を、多くの苦しみを通して全うされた」とあります。イエスを信じる、信仰の従順に至った者たちに、とこしえの救いを与えることができます。ヘブル書では、「とこしえ」が強調されています。一度罪を赦したけれども、その効果が薄くなって、また罪を赦さなければいけない、というのではなく、永遠に、完全に、究極的に罪が取り除かれて、それゆえ救いが完全であるという意味です。

私たちキリスト者は、キリストが苦しまれたように、それぞれの場で苦しみを味わいます。「もし子どもであるなら、相続人でもあります。私たちがキリストと、栄光をともに受けるために苦難をとみにしているなら、私たちは神の相続人であり、キリストとの共同相続人です。(ローマ 8:17)」とこしえの救いを受け、アダムに初め与えられていた万物の支配、栄光の冠を、キリストに従う者たちに与えられます。しかし、キリストが栄光を受ける前に苦しみを受けられたように、私たちも栄光を受ける前に苦難を共に受けます。

多くの人が葛藤していますが、この世の思い煩いによる葛藤であることが多いです。早く、「神のみこころに従ってなお苦しみに会っている人々は、善を行なうにあたって、真実であられる創造者に自分のたましいをお任せしなさい。(1ペテロ4:19)」自分がまだ自分で行ないたいことを行なっている間は、私たちはまだ、主にお任せすることを知っていません。自分で行きたいところに行くのではなく、キリストによって自分も行きたくないところに連れていかれる、という世界です。しかし、そこには、ゆだねた者にだけ与えられる平安と自由があります。イエスさまが、その先駆者として、多くの苦しみを受けられました。

10 神によって、メルキゼデクの位に等しい大祭司となえられたのです。

主がよみがえられ、天に昇られた後に、「メルキゼデクの位に等しい大祭司」となられました。ここまで著者は、大祭司なるイエスについて説き明かしを行いました。つまずいてしまいます。ここまで話しても、読者の霊的成熟度が小さいために、続けて話せなくなったのです。

2A 霊的成熟 11-14

そこで著者は 11 節から、霊的成熟に進むべく勧めを行います。そして 6 章では、霊的成熟へ進

まない時の危険を警告しています。

11 この方について、私たちは話すべきことをたくさん持っていますが、あなたがたの耳が鈍くなっているため、説き明かすことが困難です。

「この方について」つまり、メルキデゼクの位に着かれたイエス様について、話すべきことは多いのですが、「耳が鈍くなっている」とあります。ここで大事なのは、「鈍くなっている」という意味です。「怠けている」という意味合いがあります。熱心にキリストの似姿に変えられることを願って、自分の思いを変えて、主の御心にかなった行ないをするために御言葉を聞いていない、ということです。ただ聞き流しているかもしれません。そして、4章で学びましたが、聞いているのですが、それを、信仰をもって自分の生活に適用させていないのです(4:2)。それが血となり、肉となっていません。

イエス様は、御言葉を聞くときの姿勢について、じっくりと話されました。四種類の土の喩えが、それです。良い土地に落ちる人は、ルカ8章15節にこうあります。「しかし、良い地に落ちるとは、こういう人たちのことです。正しい、良い心でみことばを聞くと、それをしっかりと守り、よく耐えて、実を結ばせるのです。」正しい、良い心で御言葉を聞きます。それだけでなく、しっかりと守ります。そしていろいろな困難があるので、しっかりと耐えます。その結果として、実を結ばせるのです。イエス様はまた、二つの家の喩えを用いられました。砂の上の家は、「わたしのこれらのことばを聞いてそれを行なわない者(マタイ 7:26)」とあります。そして岩の上に自分の家を建てた人は、「わたしのこれらのことばを聞いてそれを行なう者(24節)」と言われました。

これは、表面的に十戒を守る、とか、そういうものではありません。イエス様の言葉を、イエス様を信頼するゆえ、イエス様を愛するゆえ、本気で受け止める、ということです。そして自分の心のうちで咀嚼し、そして実際の生活の中で、具体的に生かしていくことです。つまり、日々の主との交わり、御言葉を通した交わりが必要だということです。そして教会では、具体的に敬虔に生きるにはどうすればよいのか、知恵を尽くして互いに語り合い、励まし合い、訓戒もします。そして教会の活動として、有名な箇所である使徒2章42節には、「彼らは使徒たちの教えを堅く守り、交わりをし、パンを裂き、祈りをしていた。」とあります。聖書学習会は教会ではありません。堅く守り、その契約に基づいて、交わって、パンを裂き、そして祈ります。それが愛の結びつきによって、ますます熱く愛し合うのです。

12 あなたがたは年数からすれば教師になっていなければならないにもかかわらず、神のことばの初歩をもう一度だれかに教えてもらう必要があるのです。あなたがたは堅い食物ではなく、乳を必要とするようになっています。

「あなたがたは年数からすれば教師になっていなければならない」とあります。これは、賜物の話をしていません。教師の賜物が与えられている人がいますが、例えば牧者はこの賜物が必ずなければいけません。けれども、伝道者の賜物が与えられていなくても、信者はすべて伝道の働きを

するのと同じように、人に主の道を教える働きをするように私たちキリスト者は整えられていかなければいけません。

なぜ、適当な年数が経っているのに、人に教えられないのか？それは、必ずしも聖書知識が足りないから、ということではありません。むしろ、御言葉がその人の内実になっていないので、人に教えられないのです。ここに書いてあるように、「神のことばの初歩」をもう一度聞いて、そこから出発して、自分が今、どこに立っているのかを知る必要があります。キリスト者が、はっきりと他者に対して「イエスが私の主です」と言っているでしょうか？「イエスがキリスト、私の救い主なのです。」と言っているでしょうか？聖書の知識はたくさんあっても、「私はイエスをまだ主という自信がない。」ということがあるかもしれません。まず、そこから出発するのです。

神の御言葉について、「乳」と「堅い食物」として著者は例えています。私はこの著者がパウロだと思いますが、それは神学も言葉使いもパウロのそれに非常に似ているからです。パウロは、コリントにある教会に、こう言いました。「さて、兄弟たちよ。私は、あなたがたに向かって、御霊に属する人に対するように話すことができないで、肉に属する人、キリストにある幼子に対するように話しました。私はあなたがたには乳を与えて、堅い食物を与えませんでした。あなたがたには、まだ無理だったからです。実は、今でもまだ無理なのです。(1コリント 3:1-2)」

救われたばかりのクリスチャンであれば、乳を飲むことは素晴らしいことです。クリスチャンになったばかりの人から聞く話や祈りは、私たちを喜ばせます。それは、ちょうど生まれてきた赤ちゃんのように、その生命に新鮮さをともなっているからです。赤ちゃんがおむつをしているように、新しくクリスチャンになったばかりの人は、いろいろな過ちを犯します。行き過ぎた行動を取り、霊的体験によって、衝撃を受けて落ち込むこともあります。自分の必要を満たしてもらうために、注意をひき寄せる行動をとります。まだ生活のバランスが取れていません。他の人々の愛を試すこともあるでしょう。一方、世の中で能力のある働きをした人であれば、教会でもその能力を発揮しようとするでしょう。けれども、それらは霊的成長の初めの段階では当たり前に出てくることであり、健全な表れです。

「情緒的に健康な教会をめざして」という本の中に、四段階の成熟度を説明していますが、「情緒的成人」について、こう書いています。「人々を変えようとせず、また批判的になることなく尊敬し、愛することができる。配偶者、両親、友人、上司、また牧師に対して、その人が自分との関係において自分の必要に応えられるよう完全さを要求することはない。人々のありのままを、すなわち、長所も短所もひっくるめてそのまま愛する。また彼らが自分に何をくれるのかとか、どのように行動するかといったことと関係なく愛し、感謝することができる。自分の思い、感情、目標、また行動に責任を取る。ストレスがあるときには、被害者意識に陥ったり責任転嫁をしたりしない。自分の信条や価値観を、敵対することなく、違う意見を持っている人々にも語るすることができる。自らの限界、長所や短所を正確に評価することができ、また自由に人々とそれらについて語り合うことができる。自分自身の感情や心の動きに親しんでおり、人々の感情と共鳴することができる。イエスに完全

に愛されていることを心で実感することができ、人々に対して自分を顕示する必要も全くない。」
(geocities.yahoo.co.jp/gl/mgfchurch/view/20110827 から引用)

けれども、聖書の言葉を聞いているのに、こうした霊的成熟に向かっていないのであれば、それは悲劇であります。おむつをしている赤ちゃんはかわいいですが、20歳になってもおむつをしていたら悲劇です。けれども、霊的にはこれがしばしば起こることであり、それは、御言葉は聞いているのだけれども、その適用を行おうとせず怠慢になっているからです。

13 まだ乳ばかり飲んでるような者はみな、義の教えに通じてはいません。幼子なのです。

「義の教えに通じ」とは、義の教えの体験をしていると訳すことができます。栄養のバランスが良く取れていないときに、私たちはイライラしたり、体調をくずしたりしますが、霊的な栄養バランスが整えられていないときに、ねたみや競争心、仲間割れ(分派)などが容易に起こります。主にあって安息するのではなく、自分の言いたいこと、思っていることを人々に分からせようとしています。人を受け入れるのではなく、気に入った仲だけで固まります。それは霊的に満たされていないために、他のもので自分を満たそうとしているからです。つまり、霊的に幼子なのです。

14 しかし、堅い食物はおとなの物であって、経験によって良い物と悪い物とを見分ける感覚を訓練された人たちの物です。

神のみことばは、「堅い書物」です。ヘブル人への手紙や、その他の聖書の箇所を、このように丹念に学ぶことは、能動的に考えて、思いめぐらし、祈り深くし、何度も何度も噛みながら、咀嚼しなければいけません。これは面倒な作業です。一足飛びに行きたいですね。けれども、この作業を通して私たちは、霊的栄養を摂取することができます。そして、霊的に養われると、「経験によって良い物と悪い物を見分ける感覚」が訓練されます。しばしば、「教えてほしい」「言われなければ分からない」というリクエストを私は受けます。けれども、教えられない時があります。なぜなら、これは神と一人一人の間のものであり、本人が神から訓練を受けなければいけない部分だからです。

そしてある状況の時にどのように、聖書的に、霊的に応答するのか、その知恵が経験として、感覚として与えられます。これは、私のように牧会をしている者も、求道者のように求めなければいけないことです。そうすることで、何が良く悪いのかを識別できる力が身につくのです。だれかに指摘されなくても、「これは変な動きだ」と識別することができ、思いが安定し、霊的に大人として生きることができます。

ですから、私たちは成熟を目指さなければいけません。イエスさまの足跡にならって、苦しみの中でも父なる神に信頼して、従順になる、その深い関係を求める必要があります。そこからにじみ出る品性は、キリストのかおりを放ち、私たちを、良き恵みの管理者としてくれます。人々に、よりよく仕えていく、神への祭司となることができるのです。